参議院議員 東京都選挙区

朝日　健太郎

～広島港視察レポート～

東京から
誰もが輝ける社会へ

2017.5

1　視察概要・目的

平成29年5月26日に、広島市安佐南区の平成26年8月豪雨による土砂災害の被災地と、広島港を視察しました。

山に隣接する市街地の多い日本では、砂防・治水を中心とした自然災害への備えを営々と積み重ねてきました。

東京も災害の多い都市で、江戸時代より隅田川[1]の洪水に悩まされていました。江戸幕府も明治政府も脈々と東京の治水事業を進め続け、昭和5年に荒川放水路が完成したことで状況が大きく改善しました。

現代は温暖化等の影響で局地的豪雨が増えています。多摩の豪雨が都心の川の水嵩を増し通勤電車が橋を渡れなくなり通勤が混乱する等、奥多摩から島嶼部まで東京は川と海で繋がれた都市であり、東京中心部においてさえ砂防・治水とは無縁ではありません。

広島港は自動車のマツダの輸出を支えており、地方が直接世界と繋がり外貨を稼ぐ経済モデルの代表です。東京に国内の人・物・金・情報が集まりそこから海外にアクセスするというモデルから、地方が直接海外に繋がり稼ぐというモデルへと地方創生の中で求められています。これは東京にとっても、日本の中心であるという既存のポジションから変わっていかなければならないことを意味しています。

今回の広島視察は、これから東京が直面するだろう課題について、今まさに向かい合っている広島という街から学ぶために実施しました。

2　平成26年広島土砂災害被災地視察

土砂災害が発生した安佐南区等は、今も開発が進められ人口が増加し続けている地域です。斜面に張り付くように住宅が広がっていますが、被災地ではある1面がまるごと削られたように消失しており、被害の大きさを実感しました。

土砂災害の結果、街が面で消失している

国と県が協力し、市街地を守るために砂防ダムの建設が進んでいますが、工事に伴う生活への影響や、またそのために立ち退きを迫られる方もいるなど、どうしても問題は起こります。

[1] 河川名は現代の呼び名で統一

建設中の砂防ダム

広島市は経済も好調で人口増加中であるため、市街地を作るためのインフラ整備がまだまだ必要な状況ですが、日本全体で見るとインフラ維持コストが問題視され、どうインフラを閉じるのかという議論も始まっています。

温暖化に起因して激化する局所的豪雨などもあってインフラに求められるスペックが上がっていることもあり、どこを安全・安心な市街地にするのか、スプロール化を防ぎメリハリのついた公共投資をする必要に迫られています。特に東京においては中心部への人口集中、郊外での空き家問題や高齢化に伴う買い物難民の発生など、地方と違った形でのコンパクトシティ化とインフラ取捨選択が迫られつつあり、政治の決断が問われます。

復興交流館モンドラゴン

モンドラゴンの中で提供されるお好み焼き

視察した安佐南区八木で幸いだったのが、住民コミュニティがしっかりしており、相互の助け合いから復興への核になる拠点建設等が、住民主導で行われていることです。

左図の「復興交流館モンドラゴン」は、有志が立ち上がって地域を巻き込みながら立ち上げた復興拠点です。広島名物のお好み焼きの提供やクラウドファンディングの活用で運営資金を賄いながら、地域の復興や慰霊などの軸となる活動をしています。「モンドラゴン」とは「龍の住む山」という意味です。自然災害という龍に向かい合いながら、暮らしを営んでいこうとする未来への強い意志が感じられるネーミングです。

古来より日本人は災害の多いこの国土に向かい合い、自然と対話し少しずつ人里を造営しながら街を築いていました。この砂防・治水の原点をこの広島の八木地区に感じました。

3　広島港視察

広島市は太田川河口の三角州にあり、広島港は自動車のマツダを始めとする地場産業の生産・出荷を支える場であり、地域の物流を支える拠点として、中国地方の経済を支えています。また広島港は四国や瀬戸内海の各島を結ぶ客船航路が非常に多く、市街地に直結する風光明媚な地形と相まって、人々の生活に近い港であることも特徴的です。

三角州に立地する広島市

このような地域に密着した広島港ですが、河口で土砂が常に積もり、港が川で分割されてしまうという問題があります。そのため、現代の産業に求められるレベルの港湾機能を達成するために、埋立地の拡大と、港湾機能の移設・組み替えなどが必要となっています。

この政策課題を達成するために、国は水深12-14mの現代的な自動車運搬船にも対応できる深水の岸壁の整備を行っています。広島港は

地域の産業エコシステムを支える港としてさらなる発展が期待されています。

　また今回はマツダのロジスティクス機能やパーツセンターのある海田地区を見学し、港のユーザーとしてのお話を聞かせていただきました。JIT（ジャスト・イン・タイム）や混流生産といった、低コストでユーザーニーズを満たしながら世界に出荷していくための生産の仕組みが進化していく中で、港に求める水準が上がっている事を実感しました。
　急速に成長する新興国のシェアを奪い合う競争の中で、グローバル企業は、東京や広島で比較をしているのではなくて、釜山や上海と行った世界トップクラスを常に意識しています。

　日本は内需も大きく単純にはいきませんが、民間のグローバル企業がこういった目線でいることは、インフラ投資をして支える国としては常に意識していなければなりません。

世界中で愛されるマツダ アテンザ（海外商品名Mazda6／写真はチュニジア車）

以上

朝日健太郎事務所作成　2017年5月

ご意見・ご質問等いつでもご連絡ください！

参議院議員　朝日健太郎事務所

〒100-8962東京都千代田区永田町2-1-1参議院議員会館620号室

ＴＥＬ　03-6550-0620　ＦＡＸ　03-6551-0620